



「講」的集団とかつての インフラ事業に学ぶ 「交」のあり方

伊勢神宮や富士山など寺社や霊場を訪れる旅は、内外かかわらず高い人気を誇っている。そのおおもとなる「講」というシステムは、時世にあわせさまざまに変化し、宗教を超えた経済や社会に役立つしくみも生み出していた。今号では、「講」の本質を思想面で研究する長谷部八朗氏と、奈良時代に現在のダムや河川改修事業の原型をつくり出した行基集団をインフラ整備の専門知識で分析する尾田栄章氏に、今必要な「講」的交わりのあり方について伺った。

脇坂敦史 構成
増田智泰 撮影

対談

〔駒澤大学学長〕

長谷部八朗
Hasebe Hachiro

尾田栄章
Oda Hideaki

〔榊尾田組会長、日本水フォーラム元代表理事〕

奈良時代に行われた大事業

長谷部 尾田さんは畿内の歴史について大変に造詣が深い方ですが、私も淀川が好きで、その南東側にある生駒山との関係にはずっと個人的な興味を抱いています。

山腹にある有名な生駒聖天（寶山寺）を詣でるための講も、かつてはたくさんありました。商売の神として大坂商人の信仰を集めたというイメージが強いかもしれませんが、江戸時代には畿内はもとより大変広い範囲から人々を集め、そのなかには大工や魚屋といった職業講もありました。

これとは別に、山麓には朝鮮寺と呼ばれる在日韓国・朝鮮人の方々の信仰を集めるお寺がたくさんあり、私はそれにも関心があって、何度か訪れているのです。あまり知られていませんが、淀川のほとりで韓国・済州島からやってきた巫堂（ムーダン）と呼ばれるシャーマンが祭礼を行うこともあります。おそらく、地元（済州島）の海に淀川を見立てていないかと思えます。

尾田 それはとても興味深いお話ですね。淀川の下流から見ると、生駒山自体がひとつの大きなランドマークになっています。その海側の山麓地域は縄文、弥生時代を通じて遺跡も多いですし、あのあたりはとても面白いところですね。

長谷部 私は奈良、大阪を含めた宗教文化の重要な拠点だと感じています。尾田さんは、淀川流域でかつて行基が行った数々の土木工事について、1冊の本にまとめられていますね（『行基と長屋王の時代——行基集団の水資源開発と地域総合整備事業』）。

尾田 もともと私は、歴史の専門家ではありません

ん。行政の仕事を通じて河川というものと関わってきたのですが、川と水が人と人を結びつけ、地域の文化といかに深い関わりをもっているか、さまざまな歴史を調べれば調べるほど強く感じました。

たとえば戦前に土木学会が出した『明治以前日本土木史』という大部の本があるのですが、ここには近代以前に日本の河川がどのように整備されてきたか、流域別の歴史が詳細にまとめられています。ところが、この本のなかには、淀川本川についてはほとんど記述が残っていないのです。なぜかといえば、土木工事の行われた時代が古すぎるからです。他の地域では古くても戦国時代以降というケースが多いのですが、淀川はたとえば行基のような人が奈良時代から大規模な事業を展開していたからなのです。

長谷部 なるほど、歴史の長さが違いますからね。
尾田 『天平十三年記』という、行基の事跡をまとめたひじょうに信頼のおける史料を、私のような人間が土木家の目で読み込んでいくと、とにかく驚かされます。現代の洪水対策用の放水路にも匹敵する大規模な堀や溝、現代でいうところのダムに近いため池といったものを多く含む、これほど大きな規模の事業を行うだけの力を、奈良時代にひとりの僧がどうやってもちえたのか？

長谷部 確かに、現代では考えられないですね。

尾田 今でいえば、スーパーゼネコンと呼ばれるような会社が数社一緒になって、コングロマリットをつくっても、おそらく無理でしょう。しかれば政府や官僚の側にそういう構想力があるかという、それも無い。アイデアもコンセプトもなければ、それを実行するだけの能力もない。行基集団について研究することで、そういういわば現代



近鉄奈良駅前の行基像

行基（668～749）は、僧侶の民衆への布教活動を禁じる朝廷に反し、畿内を中心に民衆に仏教の教えを説いた。東大寺造立の勳進役をつとめ、東大寺「四聖」のひとつと称えられるが、池溝の構築などの土木事業、困窮者救済施設の造営など数々の社会事業も行った。民衆と共に生きた僧として今も地元民の誇りとなっている。



尾田栄章氏が立ち上げた「日本水フォーラム」のオフィスがある箱崎町からも近い日本橋橋上にて。かつて「渋谷川再生」の活動もしていた尾田氏は「日本橋の上部にかかる高速道路地下化の問題も含め、川の再生を目指す活動にも講的視点が必要」と話す。

の「閉塞感」を打ち破る何かヒントのようなものがないかとも考えているんです。

長谷部 行基とそのまわりの人々を結びつけ、大きな事業を行わせたしくみは、仏教用語でいうところの「知識結」と呼ばれるものですが、ヒエラルキーのない緩やかな組織をつくっているという意味でも、私が研究している「講」と通じるものがあるのではないかと思います。

「講的なもの」とは何か？

尾田 やはり、そうなのですね。私も「講」というしくみのなかに、かつて行基が行ったような形で大きな変革を実現する、何かヒントのようなものがあるのではないかと思います、今日の対談を楽しみにしてきました。

ある辞典によると、講は「人々が自由・対等の

資格で、かつ自由意志に基づいて共通目的のために

に結集する非職業的組織」と説かれているそうですね。これが正しい定義なのかどうかは分かりませんが、これからの社会にとって、ある意味で最も必要なものではないかと感じました。過去の歴史のなかで、講はどういう大切な役割を果たしてきたのか。今、何かをするうえで参考になる点があるのであれば、ぜひ教えていただきたいと思えます。

長谷部 私の問題意識のなかにも、ひじょうに共通する部分があると感じます。なぜ講を研究するのか。講などというものは、もう遠い昔のテーマであり、もはや新しい知見は出てこないのではないかと、と考える人もいます。

確かに講と呼べるものは減っているかもしれませんが、せんが、「講的なもの」は今も日本の共同体のなかに名前を変えてあるし、むしろ、曖昧で人々がアトム化（孤立化）しているような今の時代だからこそ、それが重要な意味をもち、その内的論理を知る必要があるのではないかと私は思っています。

尾田 狭い意味での講だけを考えるのではなく、「講的なもの」という視点ですね。

長谷部 たとえばサークルとかクラブとか、○○会などと名前は変わっているかもしれませんが、よく見てみると、これは講と変わらないうんじやないかと思うことは少なくありません。

かつて講の研究者で桜井徳太郎という方がいました。柳田國男の門下でもある民俗学の泰斗ですが、そのような切り口で講を研究した最初の人だったと思います。彼は講というもののしくみを、かつて日本人が結び合ってきた原理として捉えようとした。過去の遺物としてステティックに見るのではなく、今に生き、変わりつつあるものとしてダイナミックに研究すべきと考えたのです。

尾田 私は先日、奈良市の元興寺で弁天講の一員に加えていただきました。境内の弁財天を信仰する人たちが、さまざまな分野の人を招いて話を聞くというような面白い会です。社会的な側面と宗教的な側面をあわせもった講の典型的な形だと思いますが、こうした地域の信仰や人と人のつながりによる集まりが、社会を変えていくだけのエネルギーをもちうるには感じられないのですが。

長谷部 講というものは、あえて「いい加減」とはいませんが、「よい加減」なんです。そこにみんなが共鳴して集まってくる。縛りも、ほとんどない。あの人こないよね、まあいいじゃない、みたいな形。この緩き加減が講を持続させていく。だから、「有名な、歴史に名を残す講」というのは、講の本来の姿ではないのだと思います。今も数千人のメンバーをもつような大きな講が存在しますが、そんなふうによく組織化されてしまうと、本来の講から外れていってしまう。いつのまにかでき、いつのまにか消失していく講というの、結構多い。講というのは、むしろその方がいいんです。

尾田 そもそも、講の本来の姿というのは、どういうものなのでしょう？

長谷部 講的な集団のなかでは、地位とか役割といったものがあまり明確になっていないことが多い。一方で経済的な側面がある。そのほかに娯楽的な側面、宗教も含めた文化的な側面や社会的な側面がある。さまざまな側面が一緒になって成り立っているものなんです。カオスとまではいかないけれども、混沌としたものをあえて排除しない。だから、講が大きな力になって次へのステップとなり、そこから新たな集団ができていくということも珍しくありません。新たな動きを閉じ込めようとしないうんじやない、いわばゴムみたいに柔軟な集団です。

尾田 講というのは、ものすごくフラットな組織ですよ。誰か世話役がひとりいて、あとは同じレベルでみんながいる。そこから、いろいろなねりが出てくる。いつの時代もクリエイティブな仕事をしようとしたら、フラットな組織じゃないとダメなんです。ただ、フラットな組織が

機能するために、「この指とまれ」という誰かが必要になる。行基はまさにそういうキーパーソンだったのですね。

尾田 行基のつくった集団のしくみも、そのような融通無碍なものではなかったかと思えます。だからこそ、朝廷が「小僧（僧を軽蔑する言葉）行基」などと罵って恐れるほどのすごい勢力になったわけです。行基が畿内一円に開基したと伝えられる四十九院というのは、数千、数万人という人々が集まった宿泊所、いわば飯場だと私は考えています。行基が中心となって描いた淀川流域の未来像に、多くの人々がつぎつぎと呼応した。そうした「講的なもの」の拠点だったのではないかと思います。

長谷部 尾田さんのお話を聞いて私が思い出したのは、一遍上人のことです。鎌倉時代に生きた時宗の開祖として知られていますが、当時それは「時衆」と呼ばれていて、宗派ではなかった。集まるときに集まればいい、それは一時的でもいいんだよ、というのが一遍の考え方でした。「時衆」においては、仏教で「知識」と呼ばれる人たちが緩やかに指導的な役割を果たしましたが、実際はごちゃごちゃに活動していくんです。これがあつたからこそ、爆発的な勢いで民衆を取り込んでいくことができた。

しかし、やがて宗教化、組織化が進んで時宗が形成されていくと、「衆」のもっていたエネルギーはだんだん失われてしまうのです。

尾田 行基と一遍の例は、よく似ていますね。

講によって結ばれた「内と外」

長谷部 少し話が飛躍してしまうかもしれませんが

が、近代以前の共同体、とりわけ地域共同体の社会原理は「内と外」であると思います。基本的には自己完結した閉じた社会ではあっても、「内と外」はいつも微妙にバランスをとっていました。閉鎖的な共同体のなかに、どうやって風を通すかという知恵をかつての人々はもっていた。

近世においては、とりわけ代参講、参詣講とか呼ばれるものが、そういう外からの風を入れる役割を果たしたと思います。

尾田 代参講というのは、村落のなかから代表を立て、遠い寺社や霊場へお参りに行くわけですね。

長谷部 村の外へ行くということは、それだけできわめて開放的な経験ですが、開放感に浸ると同時に外の空気を持ち帰ってきて、地域共同体に新しい風を入れることができました。このとき外部は、内の原理を補強するためのものでもあります。いわば外を飼い慣らしていくのであり、外から持ち込んだものが内部を完全に破壊することはなかった。

尾田 なるほど。交流によって、外から持ち帰った新しいものが脅威になるのではなく、それが内部を少しずつ変えていき、力に変えていくことができるというイメージなんです。

長谷部 江戸時代に、なぜそれほど伊勢参りが盛んになったか？

やはり伊勢講があったからだと思います。講による参詣は、伊勢音頭のような楽しみも積極的に取り入れていくんです。各地から集まってくる参詣者が踊り、歌いながら歩いていく。それぞれの地域バージョンがあるんですが、それを互いに披露し合う。これは、最近の若い人たちが踊っている YOSAKOI にも似ていると思います。そして、

帰ってきた参詣者たちを「境（坂）迎え」する。村のなかではなく、まずは「境」で飲食をし、そこで「外の論理」はシャッフルされるわけですね。外部との境界である「界限」がもつ力、恐ろしさを人々はよく知っていたのです。

尾田 そこで直会をするわけですね。私はかつてモロッコ空港でメッカへの参詣者たちを見たことがあります。全員が白装束という、その熱気とエネルギーは、私たちが見慣れた観光客やツアーといったものとは、まったく違うものでした。

長谷部 今はその大切なトランスファー（移動）という経験が、消費行動のなかに絡め取られてしまっている部分が強いですね。たとえばツアー、旅行会社、観光業といったものが、かつて講が果たしていたことを補完しようとしているという見方がありますが、私は必ずしも賛成しません。

確かに、近代化の途上で交通インフラが整備され、たとえば参詣客の減っていた寺社に鉄道会社やバス会社が「テコ入れ」という形で入っていた。あるいは、かつて伊勢参りで御師がやっていたような宿を、旅行会社が「講」の名を借りつつ新しい旅館のような形で売り出していく。そのなかで、信仰的な核のようなものが失われてしまった場合も多いし、もちろん新たな形で再生した例もあるでしょう。いずれにせよ、講とツーリズムがまったく同じ役割を果たしているわけではありません。

尾田 いわゆるツーリズムは、基本的に1回きりなんです。講のようにある期間、継続してやるものとは違うでしょう。その継続という意味では、やはり人々が集まる「目的」をどのように設定するのか、が大切だと感じます。

長谷部 かつて地域と講が一体化していた時代は、共同体とオーバーラップするような形で、日常生活

活万般を講のなかでやっていくことがあったわけですね。今は、目的が曖昧なままに集まろうとしても難しい。「この指とまれ」といったとき、それがどういう意味をもっているのかということが、人々に分かりませんとね。

現代における異文化の共生と「下からの変革」

尾田 お話を伺って、現代において「講的なもの」がどのような意味をもちうるか、私なりにクリアな像が見えてきました。第2次世界大戦後の日本は一度カオスを経験しましたが、その後の70年であらゆるものをヒエラルキー化、組織化してしまっただけですね。そういう形の定まった組織のなかで個人がいくら動いても、なかなか社会は変わっていくことができない。だから、会社組織のようなものとはまったく異なる形で個人が帰属意識をもてるような集合体というか、自発的に参加するような場をつくり、そこでの経験や学びが元の組織のなかに生かされていく……。そういうしくみが日本社会のなかに必要なのではないのでしょうか。

長谷部 私がこういう研究をしようとしたのは、まさにそこだったんですね。それは可能なのではないかと思っています。

尾田 私事ですが、行基生誕1350年である来年に向けて何かやっていこうということで、お坊さんから研究者まで、さまざまな分野の人たちが集まりました。私たちはそれを「行基鍋」と呼ぶことにしたのですが、まさに新しい「講」のはじまりだと思っています。行基の活動範囲であった畿内全体がしっかりしていくために何をすべきかといったことを考える場をつくる。今日は、その

ためのヒントをたくさんいただきました。

長谷部 講というのは、集団を指す言葉でもあります。場を指す場合もあるんですね。ですから、「鍋」という名前はとても相応しいと思います。

最初に少しふれたように私は畿内の文化が好きで、特に在日朝鮮人や沖縄の人々の文化が根づいている、大阪の生野区や大正区といった場所をよく訪ねます。こうした興味が、どこかで講の研究にもつながっていると思うのは、人々が集まったところに生まれる混沌とした力が、とりわけ強く感じられるからなのかもしれません。

尾田 関西の人は、そういうカオスが好きですかね（笑）。

長谷部 そういう共生の文化が古くからしっかりと組み込まれているんですね。私の住んでいる地域の近辺では少し前からブラジル人の人口が増えており、小さな共同体がつけられはじめています。元から住んでいる住民の側には、やはり抵抗というか、閉鎖性も見られます。大阪のような文化をいくら真似しようとしても、そう簡単にはいかないものです。行政の側でも、カタカナ語の「コミュニティづくり」というような形で両者の融合を図ったりするわけですが、その経験もノウハウもない。きちっと地に足のついた方策ができるのだろうか？という疑問を感じます。

講のようなコミュニティのあり方というのは、見たくないような部分、非合理的な部分も含んだものですが、これからの日本社会が他者とうまくやって付き合っていくべきか、という意味でも、ひじょうに役に立つ視点を提供してくれるのではないのでしょうか。

尾田 異文化の共生というのはひじょうに難しいものであって、よく役場の職員なんか「下から



伊勢音頭
江戸時代、この地方でうたわれる木遣唄、祝儀唄、道中唄、盆踊り唄、座敷唄などが、御師や全国から伊勢参宮をした人々により各地に広められたとされ、いつしか憧れの地名をつけ「伊勢音頭」と呼ばれるようになった。地域により踊りの形もさまざまに変化し、その起源をさぐることは困難だが、伊勢市の催事「伊勢まつり」で披露される伊勢音頭は最も原型に近いとも言われている。
写真提供／伊勢市役所産業観光部観光振興課



【伊勢参宮略図】 歌川（安藤）広重
「一生に一度は伊勢参り」「伊勢に七度、熊野に三度、お多賀様には月参り」といわれたように江戸時代の人々はこぞって伊勢参りをしていた。当時、大坂の玉造を拠点に全国を行商していた唐弓弦師・松屋基四郎と源助は、旅籠の組合「浪花組（後に浪花講）」を立ち上げ、今の協定旅館のルーツをつくり、さらに旅のガイドブック『浪花講定宿帳』を発行するなど、「講」は経済や社会活動にまでどんどん広がっていった。
所蔵／玉造稻荷神社

が大事」などと言って住民を後押ししようとするのですが、それはやっぱり「上から」と一緒なんです。畿内には古代から多くの渡来人が逃れてきて、彼らを迎えた歴史もある。

長谷部 その通りですね。

尾田 これまで、「まちづくり」と総称されるような活動にいろいろな立場で関わってきましたが、常に思うのは、パブリックと住民ひとりひとりの両方がしっかりと機能していなければ、何もできないということ。本当の意味で人々が「下から」変えていくための「講的なもの」をつくり、それを行政や企業がじんわりと支えていくようなしくみをつくる。個人と組織という、ふたつの立場をつなぐために必要なものは何かという視点でも、今日の話はひじょうに有益だったと思います。本当にどうもありがとうございました。



長谷部八朗
はせべ・はちろう
駒澤大学学長。1950年生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。駒澤大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。駒澤大学仏教学部教授を経て2017年より現職。著書に『講 研究の可能性』（1、3）、『祈祷儀礼の世界——カミとホトケの民俗誌』、共著に『般若院英泉の思想と行動——秋田「内館文庫」資料にみる近世修験の世界』など。



尾田栄章
おだ・ひであき
（株）尾田組取締役会長。1941年生まれ。京都大学大学院工学研究科を修了後、建設省に入省。98年に退官、建設「日本水フォーラム」「渋谷川ルネッサンス」などNPO法人を立ち上げ代表に就任。2013年より福島県広野町職員として復興支援の活動を続けて現職。著書に『行基と長屋王の時代——行基集団の水資源開発と地域総合整備事業』など。